令和４年度第２回北海道立近代美術館協議会　議事録

１　日　時　令和５年３月８日（水）15：00～17：00

２　会　場　北海道立近代美術館　３階　会議室　（Web 会議システム Zoom 併用）

３　出席者　【委　員】東　尚典、飯田知男、大石朋生、北村清彦（会長）、霜村紀子、中井令、
中村　智、三澤祥子、湯浅万紀子、吉崎元章（副会長）、若原勝二
（計 11 名　敬称略 50 音順）

【事務局】近代美術館：立川館長、松田副館長、中村学芸副館長、豊村総務企画部長、
五十嵐学芸部長、土岐学芸統括官、今村総務企画課長
三岸好太郎美術館：齊藤館長、岩上副館長

４　傍聴者　なし

５　議　題

【近代美術館】

⑴ 令和４年度事業の実施状況について（資料１－１）

⑵ 令和５年度事業実施計画（予定）等について（資料１－２）

【三岸好太郎美術館】

⑶ 令和４年度事業の実施状況について（資料２－１）

⑷ 令和５年度事業実施計画（予定）等について（資料２－２）

⑸ これからの北海道立近代美術館検討会議について（資料３）

⑹ 美術館評価システムの改善について（資料４）

６　議　事

館長挨拶の後、会長の進行により議事に入る。

【近代美術館】

⑴ 令和４年度事業の実施状況について

⑵ 令和５年度事業実施計画（予定）等について

ア　事務局から資料１－１、資料１－２について説明

イ　質疑・意見

【北村会長】

ただいまの説明に関して、御質問や御意見等があれば、お願いします。

【中村委員】

特に意見ということではありませんが、アフターコロナの中で、イベントなどについて、我々と今後どのように進めていくかについて、2023 年度の取組みに反映していただければと思いますので、よろしくお願いします。

【北村会長】

コロナも３年目となり、大変苦労されていると思います。令和４年度に関しては、対策をとりながら、予定されていた事業は、ほぼ実施できたと伺いました。

近美の特別展は、特に夏などは非常に多くの人が入っていますし、今もサンリオ展が大混雑しているようです。その特別展と連動して、コレクション展にも、少しでも人が流れてくれればいいと思いますし、そういう傾向にあると伺っています。

特に、今、シャガールの展覧会をしていますが、２階には、戦時中の北海道の作品についての解説もあり、戦争が私たちに身近なものになってしまった今の時代では、時機を得たコレクション展だと思います。

両展示とも、学芸員の方の研究成果が非常に強く反映されていて、近代美術館の実力といったものを道民の方にも見てもらえる展覧会になっています。

ほかに何かご発言があれば、お願いします。

【吉崎委員】

質問と意見について、要点だけお話ししたいと思います。まず質問ですが、美術品を２点取得したということですが、何を購入されたか教えていただくことは可能でしょうか。

というのも、今展示されていますが、現役の現代アートの作品である伊藤隆介の作品を購入して、しっかりと解説分析をした展示をしているということは、素晴らしいことだと思いますので、今年

度は、どのような作品を購入されたのかということをお聞きしたいと思いました。

【中村学芸副館長】

今年度購入したのは、札幌出身で 1946 年生まれの陶芸家、小川待子さんの作品です。

小川待子さんは、パートナーである人類学者の川田順造さんと一緒にアフリカに行き、その経験を自分の陶芸の制作に反映して、大変個性的な陶芸作品を残しています。1980 年代の終わり頃から全国的にも注目され、現在は海外でも大変人気が高く、個展をすると、海外どこでも完売になってしまうほどです。大変評価が高い作家ですので、これまで、この美術館でも機会があれば収蔵したいということで、調査を続けてきましたが、今回、収集にふさわしく、価格的にも折り合いがつきそうな作品が出てきましたので、その中から 2 点購入しました。

今度の新収蔵品展でご紹介する予定になっています。

【吉崎委員】

ありがとうございます。小川待子さんは、私も素晴らしい作家だと思っていまして、以前からなんとか出身地の札幌で紹介できないかと思っていたので、とてもうれしく思います。

それから、展覧会の感想ですが、砂澤ビッキ展はやはりとても良いと思いましたし、開催中の戦時下の北海道美術についても、まだまだ研究されていない余地がたくさんあるということをしみじみと感じました。

砂澤ビッキ展については、今までたくさんの展覧会が開催されてきている中で、個人蔵のこれまで展示されていないものを中心に、工芸や素描、あるいは家具などの新しい側面を見せたということもそうですし、（一財）地域創造から助成金を受けて、展示台の工夫も効果的にされていて、本当にいい展覧会だと思いました。

それから戦時下の北海道美術についても、戦時中の美術というのは全国的にこれまで長くタブー視されてきて、あまり手をつけられなかった分野に関心が集まってきたところですが、戦争という一つの特異な時期に翻弄された作家や展覧会のありさまを、これからもしっかりと考えるべき重要なものだと思います。展覧会をよくやってくれたとも思ったのですが、正直なところ、淡々とその時の事実を見せていただいているような感じもして、まだまだこれから研究を深めていく途中経過

なのかなという気もしました。おそらく、これから、さらにその時代やそれぞれの作家の心情なども含めて切り込んでいく、始まりの展覧会なのだというようなことを考えた次第です。

それから、移動美術館を休止するということですが、本当に苦渋の選択だったのではないかと思います。広い北海道においてなかなか美術館に来られない方々にどうやって美術を届けるか、見ていただくかということで、いろいろ皆さん苦労されている中でやってきたものが、財政的な理由で休止になるというのは残念に思いますが、また、何らかの形で実施してほしいと考えています。

もう一つ質問があります。キャッシュレスサービスのことですが、実は我々の美術館でも、導入しようと考えているのですが、実行委員会で二の足を踏んでいる理由というのは、手数料などの話なのでしょうか。それとも何か他に理由があるのでしょうか。

【松田副館長】

御質問のあった点ですが、吉崎委員のおっしゃるとおり、やはり手数料の関係と、機器を誰が備えるのかといったところについても、今後検討していかなければいけない、そういったものが課題であると考えています。

【霜村委員】

感想と質問がいくつかあります。

一つには、リモートミュージアムの動画コンテンツがとても充実しており、素晴らしいと思って拝見しています。地域の美術館の、例えば、釧路芸術館の国泰寺の展示や、函館美術館の道南美術のクロニクルなど、とてもよい展示ですが、地方ということで、会期中に見に行けなかったりします。これが、動画で、ダイジェスト版として担当者からの解説付きで配信されています。展示は形として残らないので、それが担当者の説明、研究成果込みで、短い時間でまとめられて配信されるという試みがとてもいいなと思って拝見していました。

これに関して質問があります。結構な動画の本数を作成していると思いますが、先ほど説明があったように、予算が限られている中で、どういう業者の方がどれくらいの価格帯で作られているのかというのが少し気になりました。低価格で、質の良い内容を作れる業者があれば、当館も参考にさせていただきたいと思った次第です。

もう一つあります。新規事業で、学校に対するオンラインでの鑑賞教育が始まったということですが、どういう形で進められているのかをお伺いしたいと思います。

【五十嵐学芸部長】

まず、リモートミュージアムについてですが、外部の業者に委託にしているというわけではありません。すべて自前でやっており、出演も当館の学芸員がしております。ただ、映像編集のスキルのある学芸員もいるのですが、ｉＰａｄの操作が初めてという学芸員もいますので、質の高いリモートミュージアムのコンテンツをお届けできるよう、マニュアル等を作成して学芸部内で共有しています。

それから、オンラインアート教室については、オンラインですので、管内を限定せず、より広い地域で学校と美術館を結んで、鑑賞教育ができるのではないかという話題も出ています。また教室とつないだときに、一方的にこちらが解説をするというのでは、相互のやりとりにはなりません。こちらが語りかけ向こうからもリアクションしてもらうというように、有機的なやりとりができるよう工夫しながら、活発にオンラインアート教室を開催していこうと思っています。

【霜村委員】

事業を始めるときには、例えば教育委員会を通して全校に呼びかけるのか、ピンポイントで、つてを使って進めていくのか、試行錯誤されていると思うのですが、立ち上げの際のそういったご苦労も伺いたいと思います。

【五十嵐学芸部長】

この事業は、まず、日本画、版画やガラスなどの鑑賞授業のためのテーマ約 10 本を学芸部で立てています。それをもとに、年度当初に道教委の文化財・博物館課が、小中高、特別支援学校にその情報を流し、希望をとりまとめまして、地域のバランスや日程などを調整し、学校を決定しています。

【霜村委員】

移動美術館が少なくなった分、こういうところで力が入れられればいいなと思っており、期待しています。

【北村会長】

他にいかがでしょうか。今年度のことでも来年度のことでも結構です。

【大石委員】

今ご指摘いただいたように、オンラインアート教室について、興味深いと思って聞いていたのですが、今年からうちの大学も、もう全面ズームでの授業配信がなくなって対面でやるように言われており、逆に、コロナの実態に合った、遠隔で結んで授業を提供することの良さのようなものが一切失われてしまうというのも、これからの問題ではないかと思っていました。

そうした中、移動美術館がなくなったことによって、オンラインアート教室などで広く周知できるというのはとてもよいことではないかと思って聞いていました。そこで、一つ質問させていただきたいのですが、10 校というのは、特に何か縛りがあるのでしょうか。人数が増えてしまうと通信がビジーになるなどの理由があるのでしょうか。

【中村学芸副館長】

先ほどバランスということを申し上げましたが、学校側も対応できる期間が限られており、学校側の日程や、美術館で実際に対応できるように学校側との調整を行ったりすることや、人手のことなどを考えると、とりあえず 10 校ぐらいが、今のところできる精一杯というのが実情です。

【大石委員】

私も興味深くて聞いてみたいと思いました。なおかつ、小中高生はもちろん、大学生や美術に関心のある社会人の方にも、方法としては、有益な資材になるのではないかと思っているので、もし、今後、機会がありましたら、ホームページにアクセスできるようにしていくと、もしかすると、もっと見たい方がいるのではないかと思います。専門的な学芸員さんの知識を通して作品を見たりすることが、オンラインでできるのであれば、きっと応募される方がいるのではないかと思いご提案した次第です。

【北村会長】

飯田先生、高文連との連携の話も出ていましたが、何かお話はございますか。

【飯田委員】

高文連との連携の関係は、前回お話し申し上げたところです。その後、松田副館長さんともやりとりをさせていただいて、このような形で次年度の事業内容に多少なりとも関連が持てたことは、うれしく感じています。ＰＲもそうですが、高文連としては、学芸員の方に、もし可能であれば、レクチャーや講師をしていただくような取組みができれば、なお一層、繋がりができると考えています。

【北村会長】

以前、中井委員が美術館の中で解説をヘッドフォンで聞くのが大変だというお話がありましたが、技術的にどう解決できるのか。例えば、シャガールの作品はとても長い解説がついていて、そこで、ずっと立ち止まっていますが、音声で聞こえるような、そんな工夫はできないものなのでしょうか。どこか、データベースなどに置いておき、ＱＲコードを読み取ると、自分の携帯から音声が流れてくるようなことはできないものでしょうか。ただ、逆に、そうすると、携帯を使うことがまた問題になるかもしれないですし、解説の問題はなかなか難しいと思ったりもしています。

【中井委員】

ポケット学芸員というアプリがあります。先日、北海道博物館に展示を見に行った時に、スマートフォンにポケット学芸員というアプリを入れて、展示と解説を見ると、結構充実して見ることができました。また、家に戻ってから、あの展示はどうだったかなと思って再度見たりすることができ、より作品の理解や興味が深まると思いました。

今は、ほとんどの方が携帯やスマートフォンを持っていますので、そういう活用方法がいいのではないかと思います。

それから、皆さんと共通した意見になりますが、私もリモートミュージアムの動画を拝見しまして、長さが３分程度というのは、飽きない長さといいますか、ちょっとした空き時間に見られるので、本当に絶妙でいいなと感じましたし、学芸員の方の解説も入っていて、やはりいいなと感じました。

また、こちらも皆さんと同じ意見ですが、移動美術館を休止するというのは残念に思いますが、その部分をリモートミュージアムで代替できるのであれば、そうしてほしいという期待はあります。

先日、ある町で、数年前に高校が閉鎖して中学校を卒業した子供たちは町外の高校に通わなくてはいけないけれども、その子供たちに、自分たちが育った町のことを誇りに持ってもらいたいということで、まちづくりに取り組んでいる方のお話を聞きました。その時に、移動美術館もあるのに、と思ったばかりでした。来年度、予算がないということですが、その部分がリモートミュージアムで補えたらいいのだろうなと感じました。

それから、昨日の夜に BS 1 で「春子と節子」というタイトルで三岸節子を紹介する番組があったのですが、後半の方で、三岸好太郎美術館も紹介されまして、今まで見たことはあるものとはちょっと違う切り口で作品の紹介をしていました。私が普段思い込んでいた三岸好太郎とはちょっと違う感じで、よく盛られていたというか、とてもいい感じで、この人の作品をちょっと見に行きたいなと思うようないい番組でした。紹介されていた作品も「マリオネット」という作品だったのですが、普段、それをクローズアップするような映像というのはないと思いますので、本当に、その切り口で、ずっと常設しているものについても、新しい見方や解釈が生まれてきて、面白いものだと感じました。

【北村会長】

ポケット学芸員については調べていただければと思います。三岸のことについてはこの後説明がありますが、作品について、これまでと違う見方が、まだまだいろいろあるということです。ぜひ学芸員の調査研究の成果をこれからも発揮していただきたいと思います。

移動美術館については、300 万円という予算が、なぜ教育委員会の方で出せないのか、とやっぱり強く思います。休止は仕方がないとしても、ぜひ復活できるような形で働きかけていただきたいと思います。

【松田副館長】

今、会長の方からお話のありました移動美術館の関係ですが、移動美術館の意義については、当然、近代美術館を初めとして、道教委、他の道立の地方館においても、意義深い事業だと認識をしております。美術館のない地域の皆さんに本物の美術品を見ていただくということで、これまでもずっと継続してやって参りました。今、会長からお話があったように予算の問題も確かにあるので

すが、今の体制の中で、移動美術館のことを考えた時に、近代美術館が他の地域に行って、本物の美術作品を見せていくというのが、この事業の作りなのですが、例えば地方館、旭川美術館もありますし函館美術館もありますし、そういった地方館の役割。地方館が、移動美術館として、その地域の皆様に美術品を見ていただくという役割もあるのではないか。また AGH、アートギャラリー北海道という、各館の連携の中で、美術作品を見ていただくという、そういう役割もあるのではないか。そういったことを全体的に文化財・博物館課、道教委でも検討していくということなので、近代美術館も一緒に、その中で検討を進めていきたいと考えております。

【北村会長】

リモートミュージアムなどが代替できる部分もあるし、実際に作品を目の前で見るということはまた違うものなので、リモートミュージアムがあるから移動美術館がなくてもいいということにはならないのだと思います。

アートギャラリー北海道について言えば、今回、小川原脩美術館のことが紹介されたり、函館の美術館のことが紹介されていたりするので、ぜひいろいろなネットワークを通じて、道民の皆さんが実際の作品に触れる機会を提供できるような仕組みを作っていただきたいと思います。

【三岸好太郎美術館】

（３）令和４年度事業の実施状況について

（４）令和５年度事業実施計画（予定）等について

ア　事務局から資料２－１、２－２について説明

イ　質疑・意見

【北村会長】

中井委員から、今まで三岸で知られなかったような側面が紹介されていたというお話がありました。来年度は再発見と言うことなので、改めて、１２０年たって、三岸という画家が、何故この作品を書いたのかと言うことを改めて考えると、いろいろ面白い、これまでになかった見方というのも出てくるかもしれません。そのようなことを期待したいと思います。

【三澤委員】

来年度、「おばけのマ～ルとたからもの」というテーマで開催していただけるのは、夏休み期間もあるので、子供たちと行くと楽しいだろうなとちょっと思ってワクワクしておりました。近代美術館が夏休みや冬休みの期間は改修工事だということなので、よかったなと思っておりました。

【吉崎委員】

三岸好太郎美術館でやっている展覧会を毎回見ていますが、今年度になってから、特に作品の解説がすごく充実していると思います。１点１点に詳しい解説がついているんです。私は本郷新の美術館におりますが、いろいろテーマを設けていくのも重要ですが、やはり作品１点１点をしっかりと伝えていくという、この姿勢がとても勉強になると思っています。

１点質問があるのですが、来年度、またいろいろな切り口で三岸好太郎を紹介していくと思いますが、所蔵品展と所蔵品展プレミアムと特別展といろいろ枠組みがあるのですが、どういう違いがあるのでしょうか。

【岩上三岸好太郎美術館副館長】

基本的に、所蔵品展は、所蔵品のみを展示しますが、「おばけのマ～ル」展については、中井令さんと様々な連携をしながら、美術館全体で「おばけのマ～ル」の展示を行いたいと考えており、そこを普通の所蔵品展と色分けして、プレミアムと銘打って、お客さんにアピールするという意味合いで「所蔵品展プレミアム」とつけさせていただいています。特別展は、所蔵品展ではなく、他館所蔵の作品や個人の所蔵している作品などを調査して展示するという形になりますので、所蔵品展とは少し色分けをしています。

【吉崎委員】

特別展というのは、作品を借りてきて行うという位置付けだということですね。三岸好太郎が亡くなったのは、31 歳だったでしょうか。本郷新が亡くなったのが 74 歳ということで、倍以上です。好太郎が生きていた本当に短い中での限られた作品の中で、毎回いろいろな工夫がすごくされているな、といつも思っております。

【北村会長】

中井さんは展覧会に関して何かありますか。

【中井委員】

今年が好太郎生誕 120 周年、美術館開館 40 年ということと、絵本が出てから 15 年ということなので、私の方も気合いを入れて取り組みたいと思っています。展示の解説がとても充実しているというのは私も感じていました。

三岸の学芸員で、地家さんという方がいらっしゃると思いますが、学芸員という仕事が大好きで、楽しく取り組まれていることが伝わってくるような展示だと思っています。それから、タイトルが面白いですね。例えば、「恋する画家の陶酔ざんまい」ですとか、展覧会のタイトルをとても楽しんでつけていらっしゃるなと思っていました。

展覧会のタイトルというのはとても大事だと思っています。この前、招待券を知人の方にお渡ししたときに、「シャガールやっているんですよ」と言ったら、知っている名前が入っているだけでみんな、顔つきが変わりますね。ですから、やっぱり、タイトルにキャッチーなものが入っていると、集客につながるのだと思います。

【北村会長】

大石委員は、前回、「みまのめ♯」について発言されていましたが、いかがですか。

【大石委員】

いつも「みまのめ♯」で若手作家の紹介をしていただいて大変ありがたいと思って拝見しています。一つお聞きしたいのですが、これは、公募制でしょうか。応募期間や枠組みがホームページに載っているのでしょうか。私の大学の学生など、応募したいと思っている方は潜在的にいらっしゃると思うのですが、もう少しわかりやすいほうがいいのではないかという点が一つです。

あともう一点としては、AGH の事業となっているのですが、旭川美術館で、「みまのめ♯」を見たことはありません。函館や釧路などでは事業を行っているのでしょうか。あるいは、そういった可能性はあるのでしょうか、ということを伺いたいと思います。

【岩上三岸好太郎美術館副館長】

「みまのめ♯」は応募制ではありません。近代美術館の学芸員が、将来有望な若手の美術家を何

名か人選して、その中で実施しているものです。また、AGH 事業ですが、地方館はそれぞれで AGH の予算を使って展覧会を開催していますので、この「みまのめ♯」は、AGH 事業での三岸の取組みとして行っている展覧会になります。「みまのめ♯」は地方館では開催していない状況です。

【大石委員】

今後もその可能性はないという理解でよろしいでしょうか。作家の作品をそのまま借りて移動するということは、経費もかかりますし、財源的にも難しいとは思います。

北海道では、小中高までの美術への取組みは手厚く行われていると感じますが、それ以降の世代の美術への興味関心を高めていくために、切れ目なく繋げていくような取組みについては、若干手薄なのではないかと思います。

北海道は美術の大学は少ないですが、卒業制作展を近代美術館で実施するなど、今後、そういった支援のようなものがあれば、美術に興味のある層がどんどん広がっていくのではないかと思います。そういったこともご検討いただければと思います。

【北村会長】

いろいろハードルは高いかとは思いますが、公募展などでは、アンダー25 の選抜展などやっている団体もあります。それが、公立の美術館でできるかどうかわかりませんが、そういう可能性を少し検討していただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。先ほど近美の話の中で、近美と三岸を回るツアーが実施されているという話がありましたが、吉崎委員のところでは、芸術の森と一緒に回るバスツアーも開催されていますよね。潜在的にはそういう需要は高いのでしょうか。募集をすれば、一定程度の集客を見込めるのでしょうか。

【吉崎委員】

実を言うと、当館ではもうやっていません。コロナ禍という理由もありましたが、バスを用意して、お金を集めてという部分について、芸術の森が持っているバスを使ってやることが旅行業法との関係で制度的に難しいということや、少ないスタッフのなか 2 人がまる 1 日拘束されることなど、いろいろな理由によりやめました。ニーズはあると思うのですが、いつも同じような方が参加する

という実態が見えてきたということもあり、小さな美術館が頑張って取り組む事業ではなく、もう少し大きな美術館が旅行会社を巻き込んでやるのが正しいやり方なのではないかと思っています。

【北村会長】

今回は、旅行会社が企画したものですが、もっと規模を広げていくと、北海道の美術館めぐりのようなものが、一部の地方では行われているようです。観光の問題等も含めて、美術館をどうやって活用していくのかということも、課題としてあるのではないかと思いました。

（5）これからの北海道立近代美術館検討会議について

ア　事務局から資料3について説明

イ　質疑・意見

【北村会長】

協議会委員の皆様方からも、特に「目指す姿」についていろいろな意見を伺って、最終的にこういったビジョン・ミッション・コンセプトという形にまとまりました。

この資料は、概要版ですが、皆さんのところには基本構想の中間報告の素案が届いていると思いますし、道教委のホームページにも掲載されておりますので、どうぞご覧ください。また、パブリックコメントを4月8日まで募集しているということなので、もし何か意見があれば、ぜひお寄せいただきたいと思います。道議会にも報告が終わっております。これが具体的にいつ実現するのか、そのロードマップを完全に見ることはできませんが、数年後には、新しい美術館に足を踏み入れることができればいいなと思います。

収蔵されている作品が危機的な状況にあるので、道民の財産を守る上でも、なるべく、安全安心な形で収蔵できる、また、皆さんが快適な環境で観覧できる、そういった場所をつくって欲しいなと思っています。

【吉崎委員】

とても練られた、充実した内容だなと思いながら、全体を見ていました。

僕もいろいろ考えて仕事をしていますが、ミッションの中の「信頼」という言葉は、すごく心に

響いたところです。それから、また、ついつい受けがいいように、子供に対するアプローチが前面に出がちですが、「すべての人々の生涯を通じて」という表現をしていて、これから少子化で子供が少なくなるからこそ、子供たちを大切にするということだけではなく、高齢化が進む中で、美術館が何をどう提供していくのかという視点も大事だと思っていますので、その辺も盛り込まれています。来年度の夏に休館しなければならない切羽詰まった状態の中で、いち早く固めて動いて、実現することを願っております。

【北村会長】

　そのあたりは委員会でもさんざん議論をしてきました。この「キッズ」に「ウィズ」がつくだけで１年かかるという、そういう議論です。

　若原委員、日頃、美術館にいらして、何かご意見はございますか。

【若原委員】

　この目指す姿は、素晴らしいと思います。この中で、「コラボレーション」というのがあります。そして、コンセプトとして、やはり何度も美術館に行きたいと思われるようにするためにはどうしたらいいのかといつも考えています。それはお客様と美術館との繋がりだと思います。その繋がりは作品を通してお客様と学芸員やボランティアとの会話から生まれます。私達ボランティアは作品の解説をしたり、ARS ではお客様の質問に答えたりしていますが、お客様が作品や美術を通して気軽に話し掛けてくれるような、そういう会話やコミュニケーションができる場を作ることを意識していただくと、また来たくなる気持ちになるのかなと思います。それはこのコラボレーションのところに絡んでいると思うのですが、いかがでしょうか。

【松田副館長】

　おっしゃるとおりです。ボランティアの方なども含めて様々な人々や団体と協働しながら活動を進めていく、そういったところが重視されるところかなと思っています。また、博物館法が今回改正され、４月から施行されるのですが、そういった中でも美術館同士の連携といったところも必要なのかなと思っています。ぜひ多様な主体と連携しながらそういった活動を進めていきたいと思っています。

【若原委員】

その辺の今まで若干足りなかったところを強化していただくというところが大切ではないかと思っております。

【北村会長】

先ほど、リモートミュージアムの話の中で、インタラクティブ、一方的に情報を与えるだけではなく、双方向のやりとりが必要で、美術館の中でも、もちろん、皆さんが満足して過ごしていただける、あるいは、感動を分かち合うことができる、そういう美術館であって欲しいという議論をして参りました。

こういう形で１年間議論して、皆さんのお知恵も拝借しながら、とりあえずまとまりました、これが完成系ということではなく、出発点なので、これを土台として、本当にこれが全部100％実現できるかどうか、具体的な形になるのかどうか、現実の壁というのは、かなり高くて厚いのかなとも思いますが、ぜひ、乗り越えていっていただきたいと思います。

（６）美術館評価システムの改善について

ア　事務局から資料３について説明

イ　質疑・意見

【北村会長】

例えば、令和４年度の事業であれば、大体どのような評価になるのかということを、新しい改正案でシミュレーションのようなことは一応されているということですね。

【松田副館長】

はい。先ほどもお話をさせていただきましたが、全道の美術館の職員の中で、実際に令和４年度の評価をしてみたらどういう形になるか、そういったものを踏まえて、新しく今の要綱を見直していくというような進め方をしております。

【北村会長】

こういう実績があったという評価ではなくて、今後、ＰＤＣＡのサイクルを回していくような、

次に繋がるような評価とするために、この評価システムを使おうということですね。

湯浅先生、このような評価システムは、例えば道立の博物館などと比べてみた場合、どうでしょうか。

【湯浅委員】

ＰＤＣＡという目標を定めて、よく練られていますし、今年度の実績によるトライアルを経て、手応えがあったということで、とても素晴らしいと思います。ただ、この評価作業自体が大変にならないようにしていただきたいと思います。

また、定性評価において、その評価の根拠となったものがより具体的に示されて、皆さんが納得できるようにすることが重要になると思います。

もう一つは、例えば３年もしくは１年のタームで重点化すべき項目や特別に注力すべきような項目があった場合に、それをどう特別視して評価していくかというあたりも気になさった方がよいのではないかと思いました。

それから、北海道博物館の場合は、公表されているので、皆さんもご覧になれると思いますが、まずは、第一段階で現場の方が評価してその上司の方がそれをまた評価するということになっていますので、どなたが評価するかということも、しっかり決めたほうがよいのではないでしょうか。北海道博物館の場合は、担当者の名前も明記していたと思いますので、そのあたりも、明らかになればよいのではないかと思いました。

あともう一つは、ガバナンスでもしっかりとその評価をうまく使えるように、また、館の運営に生かせるようにしていければよいのではないかと思いました。

また、関連して、最初に今年度の事業についてご報告をいただきましたが、何をしたかということに加え、それを踏まえてどういう反響があったか、手応えなどもそれぞれの項目ごとにお話していただきたいと思います。

【北村会長】

特に、単年度ではなく、例えば２年、３年と期限を設けて、何かしらの重点的な課題解決のために、この美術館を運営していくという場面で、どう評価システムを活用していくかというところだ

と思います。

また、前回の会議で、コロナでお客さんが入らなかったからＤ評価になったという、とても厳し目の評価があり、それを外から見ると、この美術館はどうしてこんな低い評価なのかと思われてしまうのではないか、という意見もありました。

個々の事業の反響はどうだったのかということは、この評価とは別に行われているのでしょうか。

【松田副館長】

今回の新しい評価調書案の中でも、展示の件に関しては、資料４－３－Ｂになりますが、展覧会の開催状況ということで、どのような展覧会だったのか、展覧会ごとに特記事項を書く欄があるので、どういう反響があったかといったところも、書いていくことができると思います。

【北村会長】

霜村委員のところではいかがですか。

【霜村委員】

当館は、今年の７月で開館３周年を迎えますが、まだ体制づくりの段階ですので、まだ評価には取りかかれていない状況です。ただ、来場者のニーズを把握するため、アンケートは行っており、どういった点に満足していただいているか、どのような要望があるかということは、把握するように努めています。

【北村会長】

飯田委員、美術館を評価するということをどうお考えになるでしょうか。

【飯田委員】

普段、学校がやっているような評価の考え方とかなり違うところもありますが、個人的にはその後のいろいろな取組みも参考にさせてもらえればと感じたところです。

【北村委員】

この美術館評価は、あくまでも内部的な評価で、予算に紐づけられているということではなく、美術館をよりよい方向に持っていくための評価ということです。大学は大学でいろいろな評価の仕方がありますが、大石委員、何かご意見はございますか。

【大石委員】

このような PDCA サイクルは、そもそも一般企業をベースにして発案、導入されているということを考えると、美術館にこれを当てはめるのは適切なのかどうかとも思いましたが、これまでよりも評価が具体的になり、より還元されやすくなるとよいのではないかと思います。

また、新規に加えられた評価項目の「所蔵品データベースの整備率」、「鑑賞環境に対する満足度」、「観覧者に占める児童生徒の割合」などに関しては、さきほどご説明いただいたこれからの美術館の目指す姿とほぼ一致しています。この部分の評価が美術館のあるべき姿の充実に直結していくといいのではないかと思います。

【北村委員】

吉崎委員も、一館長として評価する立場、または評価される立場かもしれませんが、いかがでしょうか。

【吉崎委員】

基本的にはよく練られていると思いますが、一つご質問があります。いろいろな満足度をアンケートによって把握するということですが、どういう形のアンケートをお考えなのでしょうか。よく、展示室の出口にアンケート用紙を置いて、書きたい人は書くというようなタイプのものが多いのですが、これは、余程良かった人か、苦情がある人が書きがちな方法だと思います。

この方法で正確な満足度を把握できるのか疑問を持っているので、そういう方法なのか、日にちを決めて対面で実施するなど別の方法を考えているのか、満足度をできるだけ正確に把握するために、アンケートをどのように取ろうとしているのかということが、もし決まっていたら、お聞かせいただきたいと思います。

【松田副館長】

結論としては、現在、検討中ということになります。今回、評価の指標もかなり見直しておりますので、今、お話にあったとおり、実際に新しい評価を運用していく中で、どのような形で意見を的確に吸い取っていくのか、アンケートの方法や内容については、大きな課題だと思っていますので、検討していくこととしております。

【北村会長】

アンケートを書く人は、何か書きたいことがある人が多いので、傾向としては、クレーム、つまり不満足の方に寄るアンケート結果になりがちだと思います。今回の改正案では、「満足度」という指標が5項目にありますが、改正前に比べると、満足度に対する項目は減っています。一番問題なのは、6番の「鑑賞者の満足度」で、これをどうやって図るのかが難しいと思います。あるいは、新しくできた32番の「鑑賞環境に対する満足度」です。これは、どれだけ快適に過ごせたかということなのだと思いますが、レストランやミュージアムショップについては、クレームとして出てくるのではないかと思います。6番と32番について、どのように定量的に量っていくのかということは工夫したほうがいいのではないかと思います。

【東委員】

私も協議会委員という立場になり、コロナも落ち着いた時期に、美術館に足を運び、アンケートにも答えたことがあります。その時は、立場上、展示の方法について、前に比べてこういうところがとても良くなったと感じた、ということを書きました。やはり、このアンケートが次の展示に活かされるなど、アンケートを取られる方にとって、実際に今後の改善に繋がっていくということが見通せるようなアンケートであれば、より効果的ではないかと思います。

私も学校に勤めていて、年に1回評価をしていますが、いろいろなデータを集めてそれを分析して、自分で評価して、外部の方にも見ていただくことになります。その評価をどう活かしたか、その評価によって、こんなふうに変わっていったということが、教員や子供たちや周りの人にどのように伝わっていくかによってもその評価の意味が変わってくるように思います。

学校と美術館は違うと思いますが、評価のための評価ではなく、今後の美術館のよりよい形に繋がるような評価になっていけばいいのではないかと思っています。

【北村会長】

一般の方の意見をどう正確に吸い取っていくのかというのは、専門家がやってもなかなかうまくできないかもしれませんが、評価のためのシステムではなく、改善するためのシステムという形で活かしていっていただければよいのではないかと思います。

実際に、4 月からこのシステムを運用していくということですね。どうぞよろしくお願いします。

それでは以上をもちまして、今日、本日予定されていた議事を終了いたします。皆様、熱心な議論をありがとうございました。

【議事終了】

事務局から事務連絡を行い、すべての議事を終了。